

アスベスト関連疾患研究のトップランナーである、岡山労災病院アスベスト関連疾患研究センター。昨年、同センター長の岸本卓巳先生を中心に、国際貢献の働きとしてモンゴルにおいて「炭鉱労働者のじん肺とアスベスト関連疾患の診断と治療のための実践ワークショップ」の訪問指導を行い、日本における診断と治療のノウハウを伝承する機会が得られた。そこで、今回は昨年のモンゴル訪問からスタートしているアスベスト関連疾患医学研究の国際貢献の現状について、岸本先生にお話を伺った。

ご承知のとおり、日本ではアスベストの使用は禁止となっている。ばく露してから30～40年でアスベスト関連疾患が発症することも知られていることだろう。現在、東日本大震災で倒壊した建物やがれきの撤去作業でばく露の危険性が高いため、危険性を呼びかけ、対策を施しているところである。しかし、近隣諸国に目を向けてみると、アジアではアスベストの使用禁止国は韓国、シンガポールの2カ国のみ。産業としてアスベストを使用している国がまだまだあるのが現状だ。

今回の国際貢献のきっかけとなったモンゴルでは、現在もアスベストの使用を認めている状況。モンゴルは、炭鉱が多いため主要エネルギーとして石炭を使用している。その石炭を燃やす高炉には、断熱材としてアスベストが使用されている。そのほかにも、一般家庭では寒さ対策として、窓わくなどにアスベスト素材の目張りをういている。しかし、それらの代用品もなく、現在もアスベストを近隣国の中国やロシアから輸入しているという。

## ◆ワークショップ開催までの道のり

2010年の8月、モンゴルのウランバートル医科大学において、第1回目となるワークショップが開催された。その開催のきっかけは、1年半以上さかのぼる。2009年12月に北九州で行われたAAIというアジアにおけるアスベストの会合で、岸本先生がモンゴルから参加された政府保健省の高官のオユントゴスさんと医師であるデギーさんを紹介されたところからだ。

オユントゴスさんらは、自国が日常的にアスベストを使用している現状から、国民がアスベスト関連疾患に罹患する危機

岡山労災病院アスベスト関連疾患研究センターの活動から

# じん肺とアスベスト関連疾患の 診断と治療の知見をもとに国際貢献 （モンゴルにおけるワークショップを中心に）



モンゴルでのワークショップ風景

感と医師らも診断および治療ができていないという危機感があった。そこで、日本で蓄積されたアスベスト関連疾患の知見をぜひ修得し、少しでも現状から進展させたいという思いから、モンゴル政府より厚生労働省を經由し同センターへの研修要請につながったという。

同センターでも、日本の研究やノウハウを共有できる機会ということもあり、モンゴル訪問を実現するために、岸本先生自身で何度も調整を図った。それが、この第1回のワークショップであった。

### ◆モンゴルの中皮腫はゼロ？

ワークショップでは、参加者が40名で大半は女性の医師であった。初日は、じん肺をテーマに北海道中央労災病院の木村清延院長が担当された。前出したように、モンゴルでは炭鉱が盛んなため、じん肺に関しては知識があり、質問なども活発であった。

2日目はアスベスト関連疾患をテーマに岡山労災病院の清水信義院長と岸本先生が担当された。「事前にオユントゴスさんから、アスベスト関連疾患の知識はほとんどないとは伺っていました。レントゲン写真に示された胸膜プラークを見て、『結核後の石灰化』だという。これなら石灰化胸膜プラークを日常的に見ている可能性も高いと思いました。そこで私は『これは、胸膜プラークでアスベストにばく露した人に見られるものだ』と説明し、こうした所見には、診断時に職業歴を必ず聴取するように指導しました。このような胸膜プラークを日常的に見ているということは、アスベスト曝露をしている人が多いことになりますよね」。

また、アスベスト関連疾患で代表的な中皮腫については、「過去に中皮腫が3例あったというので、病理検体をお借りして、日本で調べましたが、肺がんでした」。

胸膜中皮腫と鑑別診断をするには、レントゲン写真やCT写真などで胸膜肥厚や腫瘍が認められ、胸腔鏡で病変部位を生検し、他の疾患との鑑別については免疫染色で中皮腫の特異性があるかどうかで判断されている。現在のところ、モンゴルにおいては免疫染色は行われていないことから、中皮腫と診断できない現状にある。「アスベストの使用度やプラークをレントゲン写真で普段から見ていることから考えれば、中皮腫の方は潜在的にもっといるでしょう」。そのためにも、第2回、第3回と継続した指導が必要で、それをもとにアスベスト関連疾患の対策につながればと岸本先生は願う。

「モンゴルでは、じん肺のほうが深刻だと分かっているの、2011年9月にWHOとモンゴル政府からの後援を受けて、第2回を開催する予定となっています。次回は、じん肺を2日、アスベスト関連疾患を1日というスケジュールです。炭山や鉱山だけでなく、溶接工肺などのケーススタディをリクエストされています」と話してくださった。第1回では、炭鉱のじん肺事例を15例やアスベスト関連疾患の事例15例のレントゲン読影のみで終わっていた。1事例をもっと詳細に、解説してほしいという声があったという。

さらに、今回はウランバートル近郊の炭鉱の視察や、モンゴルのじん肺症例等のフィルムを前に大いにディスカッションするというコンテンツを検討している。「非常に熱心な方々なので、第1回の修得から新たな発見を提示してもらえる約束になっています」と岸本先生。今年も木村院長と清水院長、それから岡山労災病院呼吸器内科部長の藤本伸一先生というメンバーで訪問する予定である。

◆ ◆  
モンゴルではじん肺とアスベスト関連疾患のワークショップを開催したが、現在、ベトナムやタイとも交流をはかっている。

このように、アスベスト関連疾患のノウハウを積極的に共有する事業を今後も行っていくという。引き続き、今後の動向に注目していきたい。